

# 春季大会発表要旨

特集

## ディストピアの向こうへ

——〈未来記〉の現在形

### 【特集の趣旨】

#### 運営委員会

二〇一六年のトランプ政権成立後、アメリカではディストピア小説の古典として名高いジョージ・オーウェル『一九八四年』がベストセラーとなったことが話題を呼んだ。一九四九年刊行の〈未来記〉が時代を超えて支持された要因のひとつに、独裁者による徹底的な管理社会が身近に感じられた、ということが想定できるだろう。

( 5 )  
日本近代文学史を参照すれば、未来社会を空想的に描いた小説群、すなわち〈未来記〉は、しばしば理想郷の陰画としてのディストピア

を提示してきた。そこで空想される未来が、

作家および読者の現在に根ざしていることは言うまでもない。格差や貧困への不安が蓄積された二〇〇〇年代を経て、新自由主義的価値観がいつそう亢進した二〇一〇年代の日本において、東日本大震災および放射能災に

よる「安全神話」の崩壊、「安倍一強政権」による戦後民主主義を揺るがす法律の制定や公文書偽造問題が、荒廃した社会におけるファシズム体制や全体主義国家の成立する未来を描いた小説群を生み出した。また、労働環境の悪化や少子高齢化社会の向かう未来を描いたのが、結婚や生殖、ひいては個々の身体そのものを国家が管理選別する作品群である。

斎藤美奈子は『日本の同時代小説』（二〇一八年）において、二〇一〇年代を「デイス

トピア小説の時代」と捉える。近年の作品群に描かれるのは、一見すると平等で幸福にみえて、しかし徹底的な情報統制の下で、格差と同調圧力を人々に強いる社会である。文学作品が時代を映し出す鏡であり時代の批評装置であるならば、これが近年のディストピア小説に予見された日本の向かう未来であり現在なのだ。

他方、こうした〈未来記〉の批評性を検討する上で欠かせないのは、家父長的な家族関係やエディプスの主体形成に対する違和を唱え、性差別の構造を告発するフェミニズム・ディストピアSFの系譜である。あるいは、「純文学」が周縁化してきたサブカルチャーの領域を看過して〈未来記〉の現在を捉えることはできないだろう。それらの描くディストピア／ユートピアから、文学研究は、現行の社会秩序の維持や再賦活化に回収されない人間、資源化されない人間について、どのような議論をひらくことができるだろうか。いままさに疾病による不安と恐怖が世界を覆い、その混乱を契機に管理強化と社会システムの変容が発動するかに見える現在を、〈未来記〉の検討によって逆照射したい。

## フェミニスト・ディストピアSF、 二一世紀の展望

小 谷 真 理

内包せざるを得ないという皮肉なテーマが多々散見され、それは、現実存在するダブル・スタンダードを色濃く映し出す。

この知見は、例えばディストピアSFの金字塔となった沼正三『家畜人ヤプー』（一九七〇年）をはじめ、性差別構造を描く鈴木いづみ『女と女の世の中』（一九七八年）や倉橋由美子『アマノン国往還記』（一九八六年）など日本独自のディストピアSFの構造を考察するうえの出発点となるだろう。

SFは、未来や異世界における理想世界、つまりユートピア指向を持つと考えられているが、それはディストピア指向と表裏一体をなす。SFが得意とする一連の大事件、すなわち世界を揺るがす怪獣・災害・疾病・宇宙人襲来などは、その世界をディストピアに変えるからである。

本論ではインターネットが浸透し、自由主義経済とグローバル化が拡大する二一世紀のフェミニスト・ディストピアSF、すなわち笹野頼子による『水晶内制度』（二〇〇三年）およびその続編『ウラミズモ奴隷選挙』（二〇一八年）、よしながふみ『大奥』（二〇〇五年～二〇二〇年）、村田沙耶香『消滅世界』（二〇一五年）、白井弓子『WOMBS』（二〇一七年）といった作品に焦点を当て、可視化される性差とセクシュアリティの問題点について考察する。

欧米では、フェミニズム第二派の勃興する一九六〇年代後半以降、現実の社会における性差別的な家父長制を告発するため、過酷な女性抑圧の暗黒世界を設定したユートピア／ディストピアSFが勃興する。つまりそこでは、共同体、生殖、労働、貧困、身体性など、現実の女性が常時直面する多くの社会問題を架空の世界に展開させ、その問題点をクリアに浮かび上がらせるとともに、いかに生き延びるかが模索されたのだ。その中でユートピア（＝「理想郷」）とされる世界が暗黒面を

「セカイ系」は社会を

批判できるか

——破滅のヴィジョンの系譜と新海誠

『天気の子』（二〇一九年）

森 下 達

本発表では、新海誠が二〇一九年に発表した映画『天気の子』を主として取り上げ、ポピュラー・カルチャーと社会との関わりを再考する。一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代半ばにかけて、日本のマンガやアニメ、ゲーム、ライトノベル等では「セカイ系」と呼ばれる作品群が人気を博した。これらは、大規模な戦争状況などある種の破滅が描かれている点で、広義のディストピアSFに分類できる。ポピュラー・カルチャーにおいて一代を築いた（『未来記』）であるといつていい。とはいえ「セカイ系」には、社会のありようについての詳細な設定を提示することなく、世界の危機を極小的な人間関係と直結させて描き出す特徴がある。また、打ち出される終末的なヴィジョンがいかなる論理に支え

られているのかも明瞭ではなく、世界の全体像はきわめて見えづらい。ダルコ・スーヴィンが『SFの変容 ある文学ジャンルの詩学と歴史』（一九七九年）で述べているように、SFの特徴は、虚構的な「新事象」を認識論的論理に裏づけられた形で提示するところにある。SFは、物語の世界全体の変化を描くという意味で「全体的視野」を持っており、読者の持つ経験的規範を異化する。このことを踏まえれば、上述の特徴を持つ「セカイ系」は、SF的な認識異化を誘発するものではないということになる。

では、「セカイ系」は、はたして現実社会やわたしたちの認識を問い直し得るのか。この問いを考えるために、非現実的な終末が描かれる近年のヒット作である『天気の子』を取り上げたい。本作では、近年の環境問題への関心の高まりを受ける形で世界の危機が設定されながら、それとは別に主人公たちと関連づける形で貧困などの社会問題が取り上げられ、警察等の現実の組織が救いとして機能しない様子が描かれる。世界と社会が明快に区別されている点が本作の特徴だといえるだろう。この点に着目しながら、「セカイ系」的

な想像力の社会批評性を問い直してみたい。

### 「未来学」批判としての〈未来記〉

——山野浩一「死滅世代」から  
フェミニズム・ディストピアまで

岡和田 晃

一九七〇年、作家・評論家として多方面で発言を続けていた山野浩一は、ジャンル横断的オルタナティヴ・マガジン「NW—SF」を創刊した。巻頭言の「NW—SF宣言」では、SFを「Science Fiction」科学小説」ではなく、J・G・バラードらの提唱した「Speculative Fiction」思弁小説」の歴史として読むことの重要性が高らかに宣言される

とともに、同年開催の大阪万博における主要スタッフを務めた小松左京の提唱した「未来学」が、「この現実以上に未来まで管理しようとする」ものと厳しく批判されていた。

ところが、戦後文学史のみならずSF史においてさえ、山野浩一の「未来学」批判は然るべき位置を与えられていない。スペキュレ

イティヴ・フィクションが制度としての「純文学」や「現代思想」において当たり前のアプローチになった現在、山野が抱いていた危機意識は忘却され、SFはむしろ、高度資本主義を基軸とした性・民族等への差別性を強化する方法として悪用されるきらいすらある。

そうした状況に抗うため、本発表ではまず、小松左京『日本沈没』と同じ一九七三年、あたかも小松の向こうを張るかのように発表された山野浩一のディストピア小説『死滅世代』を検証する。同作が示すものは、「単行本に収録しようとする」と編集者に必ずはじかれた」と山野自身が証言していることからわかるように、戦後日本の文学状況において、拒絶されてきた結節点だからだ。

続いて、「NW—SF」誌上において、批評家・翻訳家の山田和子らがキャサリン・バーデキンの先駆的フェミニズム・ディストピア小説『鉤十字の夜』（一九三七年）にいち早く言及した意義に触れ、三枝和子『月の飛ぶ村』（一九七九年）をスペキュレイティヴ・フィクションとして再評価したことの批評性を確認する。ここから、谷崎由依のデビュー作『舞い落ちる村』（二〇〇九年）等へ至る伏流と

しての文学史の存在を指摘することで、現在進行形で書かれる〈未来記〉でのジェンダーの扱いにまで、議論を接続してみたい。

### 現在完了形の近未来

——津島佑子『あまりに野蛮な』を読む

#### 木村 朗子

二〇一一年三月一日の東日本大震災の放射能災を受けて書かれた小説群のうち、たとえば吉村萬彦『ボラード病』（二〇一四年）、多和田葉子『献灯使』（二〇一四年）、桐野夏

生『バラカ』（二〇一六年）などは近未来のディストピアを描いたとみられている。しかし、多和田葉子が『献灯使』について、近未来ではなく現在を描いたのだと述べていたように、実際にはそれらは放射能災の現実を映した小説であった。

一方で、『献灯使』に描かれた鎖国した日本姿は、コロナ禍の現在と妙にシンクロしはじめている。小説に描かれたディストピアは仮想現実ではなく、文字通りいまを生き

る世界そのものとなってしまう。コロナ禍において、人々は基本的には正常復帰を未来に思い描いているだろう。コロナ以前の日常に戻れると考えているのである。しかし現実には、その間に失われたものとは戻らない。アフターコロナといえる時に至って、ようやく私たちはコロナ以前の地点には戻っていないことに気づくのもかもしれない。その感覚は、実際には放射能災ですでに経験していることではなかったか。三・一一の原発事故で、なにかを決定的に損なってしまったという意識を私たちは共有したはずだ。元には戻れないというのは時間の不可逆性のためだけではないのである。

放射能災を描いたディストピア小説が、それから一〇年を経たコロナ禍の現実として読まれるとき、近未来を描いた小説というのは、現在を描いているだけでなく、過去から現在に至るまでの継続する時間を描いてもいるのだろう。そうした時間のあり方を小説が考えさせるのだとして、震災後、津島佑子が放射能災を描くにあたって戦前から戦後を描いてきたことの意味をここでは考えてみたい。たとえば津島佑子『あまりに野蛮な』（二〇〇

八年）は、教員として転任した夫とともに植民地の台湾に住んだミーチャ（美世）の時間と、ミーチャの跡を追って二〇〇五年に台北を訪ねた姪のリーリーの語りの時点との往還によって成る小説である。ミーチャの台湾での経験は一九三一年から一九三五年と設定されており、一九三一年は霧社事件の翌年、一九三五年はマグニチュード七・一を記録した台湾大地震の起こった年にあたっている。本発表では津島佑子『あまりに野蛮な』をとおして未来をみとおす鍵としたい。

# 春季大会研究発表

## 個人発表

### 「時代」を再現する尾崎紅葉

——「紅懐紙」・「伽羅枕」・「伽羅もの語」  
に見る人物造型——

高橋茂美

尾崎紅葉の初期小説には、「紅懐紙」（明治二十二年十二月二十三日～十二月二十六日、「読売新聞」）、「伽羅枕」（明治二十三年七月五日～九月二十三日、「読売新聞」）、「伽羅もの語」（明治二十四年一月一日、「読売新聞」）附録「筆はしめ」に発表）などの、遊女を中心人物とした作品がある。尾崎紅葉は「伽羅枕」の冒頭で、自身の小説を「女物語」と意味づけた。以来、紅葉の初期小説においては特に、女性を中心人物である物語、もしくは女性が語る物語であることが定着し、その枠

組みによって論じられてきた。本発表では、遊女を中心人物とした三つの作品を紅葉の「時代」意識によって捉え直したい。

三つの作品に共通しているのは、際立った性質を持つ遊女の造型である。「紅懐紙」の浅妻の「難有き志の女」の造型は、「伽羅枕」における「一癖者」の佐太夫の多面的な造型と、「伽羅もの語」の「当世の希物」の初梅の造型に生かされていく。また、金と恋によって翻弄される遊女の性質が、最終的には「美德」や「報恩」などに辿り着くよう、様々な方法で描かれている。遊女という枠組みを超えて、作品内の「時代」における普遍的な真実として記されている。

浅妻、佐太夫、初梅の人物造型の方法と、「二人比丘尼色懺悔」（明治二十二年四月、「新著百種」第一号、吉岡書籍店）との関連も看過できない。紅葉の『二人比丘尼色懺悔』が「時代」と「時代小説」を意識して執筆されたように、三つの作品も、それらの捉え方を変化させて完成した。言わば、『二人比丘尼

色懺悔」のバリエーションでもある。ただ、紅葉の「時代」意識は、「江戸」から「明治」ではなく、常に「明治」を出発点としていた。

本発表では、江戸時代の作品を下敷きにし、再現した紅葉の一連の「遊女もの」の人物造型について、「江戸」と「明治」への紅葉の「時代」意識を辿りながら考察したい。

### 田山花袋『第二軍従征日記』

——パノラマ描写と告白形式の

語り手を中心に

ミヒールセン・エドウィン

田山花袋は明治三十七年日露戦争が勃発すると第二軍の写真班として従軍記者を務めたと。その経験を明治三十八年一月博文館から刊行された『第二軍従征日記』にまとめた。花袋は「緒言」において「見た所、聞いたところ、感じた所は、残す所なく、（…）書いたつもりで、（…）戦争の面影の片鱗くらいは見えるであらうと思う。」と書いた。しかし、大本営から観戦の許可を定期的に得られな

かつたため、同じ「緒言」に「帰国してから、却つて新聞を繕いて知つたといふ有様で、その観察、叙述共に不完全なところがあるに相違ないのである。」と花袋は自分の意図に反した。本発表では、花袋は『第二軍従征日記』の執筆にあたって如何に「残すところないこと」「不完全なところ」という描写の齟齬に直面したかということを検討する。

本作の特徴としては、戦争を描写する文章には写真と関連する表現が頻繁に書かれている点が挙げられる。花袋が試みた客観的な描写は写真の発展と並行した。特に十九世紀末に発明されたパノラマ写真が新しい視覚効果を生み出し、花袋の眼に映じた広い戦地の光景への描写に重要な影響を与えたと考えられる。花袋は文字で戦争の現実をそのままうつす写真と同じように客観的に写真しようとしたが、しばしば言葉に窮してしまった。結果として、花袋は戦争描写の限界を認め、作中の描写には無理があつたと読者に告白した。本発表では、「第二軍従征日記」における「パノラマ」と関連する箇所を踏まえながら、田山の戦争描写の試行錯誤を吟味する。具体的には、戦争や戦地などがどのように語られた

のかを分析し、作中の語りの変容に注目することで、戦争を客観的に書き写そうとした花袋の意図と真逆に主観的な表現に溢れる文章に留まってしまう過程について論述する。現実とのずれを調整することから客観的な戦争描写の失敗を告白することによって写真と叙情が混在する花袋の独特な作法が生まれると本発表で論じたいと思う。

### 「ざしき童子のはなし」に 描かれた「郷土」

—— 都会への眼差し ——

#### 服部 大

本発表では民話、フォークロアとして読まれてきた宮沢賢治「ざしき童子のはなし」(『月曜二月号』一九二六年)を発表誌の編集方針、同時代の観光から考察する。

本作を典拠とされる『遠野物語』『奥州のザシキワラシの話』と比較すると、子供らしさや田舎らしさが強調され、家神ザシキワラシがもたらす福の内容も、病気が治る、大学

を終わるなど個人的問題の色が付与されている。本作が発表された雑誌『月曜』は都会の大人を読者対象として想定していた。本作は民話を題材としながらも、都会の大人向けに描かれた作品であつた。

次に本作の舞台について考えたい。典拠における舞台は遠野であつたが、本作の舞台は花巻近辺に変更されている。同時代の花巻では、賢治が花壇設計を行った花巻温泉が、観光地、レジャー施設として日本全国にキャンペーンを行っていた。宣伝の中には鹿踊り、田植え踊りといった田舎らしさを強調した宣伝も確認できる。さらに、急増する観光客目当ての郷土土産の発見、開発も進められていた。本作発表当時の花巻において「郷土」は観光を目的として都会に向け創られるものであつた。

都会向けに手を加えた田舎を描くという本作の手法は、当時花巻で行われていた「郷土」紹介と類似する。しかし、一読しただけで当時の読者に本作の具体的な舞台はわからず、舞台を限定できない本作に観光の本来の目的である商業性を読み取ることは難しい。岡村民夫は賢治と花巻温泉の関係を詳細に分

析したうえで、賢治は花巻温泉の大資本による大型化を批判的に見ていたとしている（『イーハトーブ温泉学』みすず書房、二〇〇八年）。では、花巻の観光を批判的に見ていた賢治は都会の大人に向けてどのような「郷土」を描いたのか。都会向けの「郷土」紹介という手法を使いながらも、観光とは異なる形で「郷土」を描いた本作からは、賢治の観光に対する問題意識が見て取れる。

## 日中戦争期「モダン都市」の 銃後俳句論

榎 本 由 貴

本発表は日中戦争期に俳句の詞華集が立ち上げた銃後表象の問題を明らかにする。俳句表象が日中戦争期に見せた「モダン都市」の〈日常〉と戦争の〈非日常〉の交錯の解明は、〈非日常〉と〈日常〉の両方を描出する試みが集団的記憶を立ち上げる際、それがどのような成立を見せ、また受容されるのかを考える有用な手掛かりとなる。

『俳句研究』（一九三八・一一）に掲載された詞華集「支那事変三千句」には、編集部が同人誌等から収集した俳句が前線編と銃後編に分けて掲載された。銃後編には「水着」や「ビヤホール」などの〈日常〉と「千人針」「献身」などの日中戦争下の〈非日常〉の交錯が見られる。

千人針水着の乙女颯爽と 長澤鴨水  
祇園献身ビヤホールにて  
ビヤホール娘を膝に父の酔へる 岩崎宇三郎

阿部誠文は「支那事変三千句」中の国民生活を詠んだ俳句を戦争俳句であると評した山口誓子や吉岡禪寺洞の思考方法を、やがて国家総動員法に繋がるものと指摘する（『ある俳句戦記：詩華集にみる従軍俳句』花書院・二〇〇〇）。しかしこの詞華集は、書名からして国民生活と戦争の関連が明らかであり、誓子や禪寺洞の「思考方法」だけが国家総動員法に繋がるとはいえない。阿部論は優れた戦争俳句とは何か盛んに議論された当時の文脈にあまり注意を払わず、「戦争俳句」を一絡げに議論している。右記の「父」や「乙女」、それを発見した作家とへ出征の門さわ

やかに国歌湧く 青木郭公）ではその性質は異なる。

左部赤城子が一九三九年に創刊した九州北部を拠点とする同人誌『新大陸』には、「モダン都市」のコードが用いられた銃後俳句と全体主義を掲げて作品や俳壇の構造を論じる評論が並んで掲載されている。「モダン都市」を銃後の〈日常〉とみなし戦意高揚を後押しする資料を補助線とすることで、詞華集の中で戦争に対する抵抗と同調の間でせめぎ合う銃後の「モダン都市」の〈日常〉を多角的に捉えることが出来る。

カテゴリーなきカテゴリー  
——「震災後文学」のカテゴリーの  
生成をめぐる

瀬 川 拓 磨

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故を契機として生み出された文学作品を指す「震災後文学」という総称は、それら作品群の成立と読解をめぐるある種の文学史として

も思考されてきたのではないだろうか。しかし、複合的に発生した震災と原発事故の被害と実態をその歴史性から批判しなければ、「震災後文学」はナショナリズムなどのイデオロギーと結びついたカテゴリーとして権力や体制に利用される危険を持つ。本発表では、そのような危険性を震災後文学の「カテゴリー的生成」と定義して批判し、そうした領域化への抵抗を「カテゴリーなきカテゴリー」の構想として、津島佑子『ヤマネコ・ドーム』（二〇一三）と吉村萬壺『ポラード病』（二〇一四）の読解を通じ論じる。

震災と原発事故の被害は構造的要因によってもたらされた。その構造は、一つに日本における震災からの「復興」言説の歴史的展開の分析を通じ考えることができる。関東大震災から東京が復興することを「帝国の発展」に結びつけた帝都復興院初代総裁である後藤新平は「国家有機体論」で知られる。後藤が国民を「有機体」と認識する思想と、原発事故後の避難・帰還政策において政府が被害者を数値的に管理するシステムは、生命を管理可能な「人口」として把握する点で通底している。復旧ではなく「復興」というタームを

権力側が使用する時、そこには生政治的抑圧の構造がある。本発表は「共同体」の視座から『ヤマネコ・ドーム』と『ポラード病』を分析することで、両作品がこの抑圧構造にどのような抵抗を試みているかを論じる。

本発表は「震災後文学」をめぐる読解と実践が生政治への不断の抵抗と批判にならないといけないと考える。「カテゴリーなきカテゴリー」という言葉は文学史を批判しているのではない。震災という出来事と文学を接続する試みを連帯に開くために、震災後文学を閉塞させずに運動として思考することをこの試みは目指している。

## パネル発表

### プロレタリア文化運動と ジェンダー

鳥木 圭太、笹尾 佳代  
池田 啓悟、飯田 祐子

本パネルは、一九三〇年前後のプロレタリア

ア社会文化運動とジェンダーとの関係を問うものである。プロレタリア文学におけるジェンダーの問題として、プロレタリア女性作家の動向や作品については研究の蓄積がある。

一方、プロレタリア文学がつくり出した文化領域のジェンダー構造についてはあまり研究が進んでいない。その背景には、プロレタリア運動では階級が何よりも重要視されたため、ジェンダー問題は後景化したという見方があるだろう。たしかに、女性であっても山川菊栄などの社会運動家は、ブルジョア自由主義的なフェミニズムを批判する際、ジェンダーより階級を優先した。同時に、その彼女たちが「婦人部」の設立などの形で階級問題の一部に女性問題を組み込もうとした時には、運動の主流による非常に強い抵抗があったこともよく知られている。いずれの局面でも、階級が最重要な論点となりジェンダー問題が退けられたといえる。こうした状況をふまえたうえで本パネルにおいて検討したいのは、階級かジェンダーかという両者の分離を再確認する問ではなく、階級という論点がいかにジェンダー化していたのかという問いである。プロレタリア文学の文脈において



ジェンダー化したナラティブは決して排除されてはいない。むしろ運動の中心と周縁、内部と外部を構成するナラティブにおいてジェンダーは強く機能してきたと思われる。四つの報告によって、階級を語る論理にジェンダーがいかに連動し交差しているかという問題について検討する。

鳥木圭太「メディアとしての身体——葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」における女性表象」では、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(『文藝戦線』一九二六年一月)の中で女性表象が男性主体の欲望を喚起する媒体(メディア)として立ち上がる様相を考察する。本作は女工がセメントの生産過程のなかに潜り込ませた手紙を、生産者と消費者をつなぐ新たなメディアとして描き出す一方で、この手紙を(前衛)と(プロレタリアート)をつなぐメディアとして前景化していく。その際、そこで表象される物語は(恋人を失った女性)から(男性労働者)へ送られる手紙として異性愛的なプロットの中に収納されていく。本発表では、この新たなメディア創出の過程が物語のプロットをジェンダー化していく様相を開示したいと考える。

笹尾佳代「プロレタリアとしての娼妓表象と廃娼運動」では、一九二〇年代後半、廃娼運動の高揚とともに登場していた娼妓の表象／自己表象をとりあげる。娼妓運動に関わっていた賀川豊彦の「偶像の支配するところ」(『婦人之友』一九二六年四月—一九二七年二月)や、遊廓から逃れた後、労働運動家となっていた松村喬子の「地獄の反逆者たち」(『女人藝術』一九二九年四月—九月)など、この頃の娼妓をめぐる物語には、その実態を(労働)と捉える視座や、労働運動家の助力によって「自由廃業」を遂げるまでが共通して描かれる。これらの娼妓表象／自己表象を、運動の周縁に配されていたジェンダー・セクシャリティと階級の問題系の交差点と捉え、その複合的な構成のあり方と諸問題を検討したい。

池田啓悟「ハウススキーパーという(階層)」では、中本たか子「受刑記」(『中央公論』一九三七年六月)を始めとした戦前の女性共産主義者の回想を取り上げ、ハウススキーパーがプロレタリア社会文化運動の中でひとつの階層として存在していたことを論じる。これが大きな注目を浴びたのは戦後の政治と文学論争のときであったが、ここでは共産党が意図

的にそれを「制度化」していたのかどうかといった話に終始し、議論そのものが深められたいが、ハウスキーパーが何を意味するかということですら各人によって認識にずれがあるように思う。このとき典型とされたのは小林多喜二「党生活者」の笠原であったが、先の回想群から見えてくるのは、時期によっても異なる多様な経験のあり様である。それらを読み解くことで、そもそもハウススキーパーとは何であったかを明らかにしていきたい。

飯田祐子「プロレタリア文学運動における「金」のジェンダー化」では、「金」のジェンダー配置について論ずる。たとえば、円本の嚆矢としてよく知られたブルジョア・ジャーナリズムの象徴であり「文学史」を輪郭づける現代日本文学全集(改造社)の最終巻として、「プロレタリア文学集」(第六十二集、一九三一年一月)が刊行された際、編者の江口渙と貴司山治が用意した理由は「救援」であった。「救援」という論理は、この本を、商品ではなく募金のツールへと変容させる。加えて、「救援」領域が女性ジェンダー化されていることに注目したい。本発表では、一般的

には「生産」の問題に配置される「金」の問題群が、プロレタリア文学においては「再生産」領域と結び合わされて女性ジェンダー化することを論ずる。

入会手続き・会費納入等についてのご案内

○入・退会の手続き、住所・所属などの変更、その他会員に関するお問い合わせやご連絡は、左記の特定非営利活動法人お茶の水学術事業会「日本近代文学会」係宛にお願いいたします。

○入会の場合は、お茶の水学術事業会へ連絡すると申込書が送られてきます。入会届に記載する推薦人の姓名は必ず、自署でお願いいたします。なお、入会申込書は、日本近代文学会のホームページからもダウンロードすることができます。

○退会の場合は、その旨を葉書でお届けください。

特定非営利活動法人・お茶の水学術事業会

「日本近代文学会」係

〒112-8610 東京都文京区大塚二―1―1

お茶の水女子大学 理学部三号館二〇四号室

電話・ファックス 〇三(五九七六)一四七八

メールアドレス [anjis.info@npo-ochanomizu.org](mailto:anjis.info@npo-ochanomizu.org)

○会費、機関誌購入代金などは、左記の郵便振替口座にお振込みください。

記号・番号 00140-1-260401

加入者名 日本近代文学会